舘岡洋子編

日本語教師の専門性を考える

ココ出版、2021年発行、296p.
ISBN：978-4-86676-033-9

孫　雪嬌・古賀　万紀子・伊藤　茉莉奈

1．はじめに

本書の目的は、日本語教師の専門性に関する議論の歴史をふまえ、日本語教師の専門性を捉え直すことである。本書では、日本語教師の専門性とは、固定的な資質・能力ではなく、個々の教師が自身の理念とフィールドとの間で最適な方法を編成し、実現していくという動態的な営みだと主張し、「専門性の三位一体モデル」を提案する。

2．本書の内容

日本国内では日本語教育の推進に関する法整備が進んでいるが、日本語教師の専門性については社会的に十分に認知されているとはいえない。近年、日本語教師が担う仕事は変化かつ拡大してきている。今こそ日本語教師が自身の専門性を自覚し、社会に発信していくべきではないか。このような問題意識のもとで執筆された本書は、全４部から成る。

第１部【問題提起編】では、従来の日本語教師の専門性に対する見方や教師の専門性に関する議論の歴史を振り返り、「日本語教師の専門性」について問題提起を行う。文部科学省などが策定する日本語教師に必要な資質・能力のリストに対しては、「準拠枠」と「参照枠」という２種類の捉え方ができる。前者は「一般的・静態的専門性観」、後者は「個別的・動態的専門性観」によって支えられている。そして、本書が立脚するのは、専門性を個々の教師が自ら作り上げていくプロセスとして捉える「個別的・動態的専門性観」である。

第２部【歴史編】では、日本語教師の役割と養成・研修に関する言説の歴史的変遷を辿ったうえで、日本語教師の公的資格制度をめぐる近年の動向を概観する。歴史的にみて、日本語教師の役割は、政策や施策を反映するかたちで外側から規定されてきた。つまり、日本語教師自身による「日本語教師の専門性」の議論が不在であったということである。

そこで、第３部【提案編】では、日本語教師が自らの専門性を省察するための「専門性の三位一体モデル」を提案する。「専門性の三位一体モデル」とは、日本語教師の専門

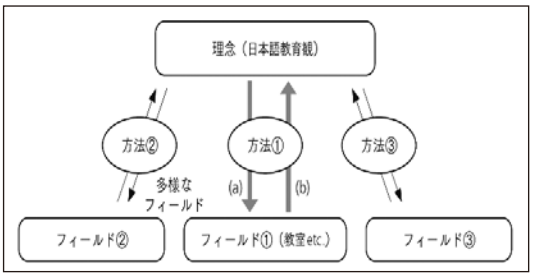

図１　「専門性の三位一体モデル」（p.105）

性を「どんな日本語教育を実現するのかといった自身の理念（日本語教育観）とどんな特徴をもったフィールド（ことばの教育現場）なのかといったフィールドの固有性との間で最適な方法を編成し実現できること」（p.104）とし、その専門性を捉えるための新たな枠組みである。このモデルでは「省察」が重要な意味を持つ。そして、日本語教師の省察を促すための場として、このモデルを活用した「三位一体ワークショップ」を提案している。

第４部【実践編】では、７つの実践を紹介している。異なる実践者たち（日本語教師や地域の多文化交流コーディネーターなど）が、異なるフィールド（日本語学校や日系企業など）で、自らの実践に対する省察を深め、専門性について考える。こうしたさまざまな実践研究を通じて「どんなフィールドなのかを実践者が評価し、自らの言語教育観にもとづき、そのフィールドにあった方法を動態的に編み出せることこそ専門性といえる」（p.160）という本書の主張を読者に理解していただきたい。

３．おわりに

本書の意義は、「専門性の三位一体モデル」を示すことにより、「一般的・静態的専門性観」から「個別的・動態的専門性観」へという日本語教師の専門性観のパラダイムシフトを提唱したことである。

ただし、いうまでもなく、このモデルも専門性を規定するための「準拠枠」ではない。本書は「日本語教師の専門性を考える研究会」（http://nihongokyoshi-senmonsei.com/）のメンバーたちによって共同執筆されたものである。本書の作成を通じて、本書の執筆者たちは「私は日本語教師として何をすべきか、どうあるべきか」を省察し、対話を重ねた。それは、自らにとっての日本語教師の専門性を動態的に構成し続けていくプロセスであった。読者には、そのプロセスを追体験していただくとともに、そのプロセスを自身の専門性を考えるための「参照枠」として活用していただきたい。

社会の変化に伴い、これから日本語教育のフィールドはますます多様化、複雑化することが予想される。そうした中で、日本語教師はより自身の専門性に自覚的になるとともに、その専門性を社会に向けて発信していく必要があるだろう。本書がその発信の一つとなり、日本語教師の専門性に関する対話の機会が増えていくことを望む。

（そん　せつきょう　行知学園／早稲田大学大学院日本語教育研究科・修士課程修了）
（こが　まきこ　神田外語大学アカデミックサクセスセンター）
（いとう　まりな　早稲田大学大学院日本語教育研究科・研究生）